
鞘少年 × 刀少女

千風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鞘少年×刀少女

【Nコード】

N8913U

【作者名】

千風

【あらすじ】

かつて名の知れた刀工だった父を持つ少年、新太は、ひょんなことから、鞘だけを持った青年と出会う。刀を持つことを勧める新太に、青年は「刀とは巡り合うからいい」と断るのだった。そこへ、新太の父が、同じように出会った少女を連れてきて……巡り合う、刀と鞘の物語。 伊那さま主催の【和風小説企画】参加作品です

1・起（前書き）

はじめまして、こんにちは！千風です。

伊那さま主催の和風小説企画に参加させていただくことになりました。
で、このお話を書きました。

時代背景とかは特に定まっていらない、単なる和風ファンタジーです。
少しでも楽しんでいただければ、幸いです。

ではでは、どうぞお〜

1・起

きつと巡り会つ、その日まで。

——カラン、カラン。

あまり聞き慣れない音が、耳につく。音が表す通りに、空っぱの何かが奏でる音。

音のする方に目をやれば、そこには、一人の青年の姿があつた。青年は、乱雑に伸びた明るい色の髪に、血色の良くない肌、目の下には青いクマも見え、不健康を表したような表情をしている。凛々しい眉や、はっきりとした黒目や、小高い鼻は、恐らく、彼が健康な状態であれば、整った顔立ちの部類に入るのだろう。白い模様の入った紺色の着物は皺だらけのよれよれで、足元の草履も土で汚れきっているが、彼が周囲の目を引くのは、その薄汚れた容姿ではない。

彼の背中。

彼の背中には、一本の鞘が、背負われている。鞘の両端部を固く紐で縛り、その両の紐を、胸の前で結んでいるのだ。

日の光に輝く、美しい漆塗りの施された黒い鞘は、確かに目を引くものがあるが、彼が視線を集めているのは、その鞘が美しいからではない。その鞘に、収められているはずの刀がないからだ。刀を、刀を収めた鞘を持ち歩く男が、多く出歩くこの町では、彼の姿は、酷く異様だった。

先ほどから響く、この空虚な音は、その空っぱの鞘と、彼が腰に付けている、木製の物入れが当たる音であつた。

「はあ……」

人々が行き交う、町の大通りの真ん中で、青年が突然、深々としやがみ込む。

「腹、減った……」

力なく呟くその声とは真逆に、盛大に叫ぶ腹の虫。もう限界とばかりに、青年が空腹の腹を抱え、蹲る。

「今なら、米一粒でも、腹満たせそうな気がする」

「お腹、空いてるの？」

「へ？」

前方の、近いところから掛けられる声に、動かすだけでも空腹が進行するため、あまり動きたくないながらも、青年が渋々とその顔を上げた。青年の目の前に立っていたのは、まだ幼い、一人の少年だった。しゃがみ込んだ青年よりも、少し視線が高いくらいだ。色素の薄い髪に、その髪と同じような茶色の大きな瞳。青年と違って、皺の入っていない、清潔な着物を着ている。その大きな瞳を、少年はまっすぐに、青年へと向ける。

「これ、食べる？」

そう言つて少年が青年へと差し出したのは、布に巻かれた、握り飯であった。丸みを帯びたその形、きらきらと輝く白い粒に、青年が思わず目を輝かせる。

「食っていいのかぁ!？」

「う、うん。昼の残り、食べ切れなかったやつだから」

身を乗り出した青年のその勢いに、少年が少し戸惑うようにしながらも答える。少年の答えに、さらに目を輝かせた青年が、先程までの脱力振りが嘘のように、握り飯を受け取り、素早く立ち上がる。

「よっしゃあ! いただきま……!」

「お母さん、お腹空いたよお」

大きく口を開け、一口で握り飯を平らげようとした青年であったが、青年の左方、大通りに並ぶ店の前辺りから聞こえて来た幼い声に、青年の動きが止まる。

「何か買つてよお」

「無理言っんじゃないよ。大通りの店に、うちが買えるようなものなんて売ってないんだよ」

「でも昨日の晩から、何も食べてないんだよ？」

「仕方ないだろう？ 我慢しな」

声の聞こえてくる方に、青年が目を向けると、そこには、五つ、六つくらいの幼い女の子と、その母親らしき女の姿があった。二人は、青年にも負けないほどに、薄汚れた格好をしている。見ただけで貧しいと分かるその親子は、大通りを行く人々に、時より冷たい視線を投げかけられている。母親に冷たく言われ、落ち込んだ様子で俯いた女の子の姿を見て、青年が目を細める。青年は口元に運ぼうとしていた握り飯を、口から離すと、ゆっくりと母娘の方へと歩き出していく。

「お、お兄ちゃん？」

その青年の様子を、握り飯をやった少年が、戸惑うように見つめる。

「ほら、これやるよ」

「えええ！？」

あつさりと握り飯を女の子へと渡す青年に、見守っていた少年が思わず、驚きの声をあげる。

「いいのお！？ お兄ちゃん！」

「いいの、いいの」

握り飯を両手で抱えるようにして受け取った女の子が、満面の笑みを浮かべると、青年も笑みを浮かべ、女の子の頭を撫でた。

「そんな、悪いです。私たちには、お支払いするお金が……」

「別に気にしないで下さい。どうせ、貰ったものですから」

「そうですか？ じゃあ」

「ありがとう、お兄ちゃん！」

「おう」

そう逆らうこともなく、青年の好意を母親が受け取ると、女の子は青年へと、笑顔で礼を言った。嬉しそうな笑顔の女の子と、深々と頭を下げた母親を、青年が軽く手を振りながら見送る。二人が見えなくなった頃に、握り飯をあげた少年が、青年のところへとやって来た。

「な、なんであげちゃったの？」

「へ？」

問いかける少年に、青年が目丸くする。

「あ、悪いな。お前がくれたもんなのに、勝手にあげちゃって」「そんなのは別にいいけど、お兄ちゃん、お腹空いてるんじゃないの？」

不思議そうな、と言うよりは、ひどく戸惑った様子で、少年が青年へと問いかける。

「空いてるぜ？ もう三日も何も食ってねえし」

「じゃあなんであの子に、おにぎりあげちゃったの？」

「腹減ってるみたいだったから」

「お兄ちゃんだって、お腹空いてるんでしょ？」

「ああ、空いてるけど？」

当然のように答える青年に、少年が、問いかけることをやめる。

何度問いかけても、青年は、少年が何に疑問を持っているのか、わかってくれる気がしなかった。自分よりも他人を優先したという意識すらないのか。青年は、“いいことをした”というよりも、“当たり前のことをした”という様子だった。その青年の様子に、少年がどこか呆れたように肩を落とす。

「もついいや。お兄ちゃん、僕の家に来ない？ ご飯、食べさせてあげるよ」

「マジ！？」

少年の言葉に、青年が再び、目を輝かせる。

「けど俺、無一文だし、金目のものも何も……」

「いいよ、タダで」

「マジかよ！？ お前、ガキのくせに太っ腹だな！」

「お兄ちゃんほどじゃないよ」

「へ？」

その言葉に、青年はまた、意味のわかっていない様子で首を傾げた。

「僕、新太。^{しんた} お兄ちゃんは？」

「俺？ 俺は飛壱だ」^{ひいち}

笑顔で答え、青年は、また鞘の空っぽの音を響かせながら、少年の後についていく。新太と名乗った少年は大通りを抜け、町外れの方へと歩を進めていった。新太に少し遅れるようにして青年、飛壱も続く。徐々に周囲の景色は、町の家々から畑へと変わっていった。町がすっかり遠くなり、山へと続く森が見え始めた頃、新太が口を開いた。

「もうすぐ僕の家だよ。だからお兄ちゃん、もう少しの辛抱っ……あ」

急に言葉を止めた新太に、飛壱が首を傾げる。新太は、前方に見えて来た小さな木製の家を見つめ、険しい表情を作っていた。家自体を見ているというよりは、家の前を見ているようだ。新太の視線に合わせ、飛壱もそちらへと目をやると、家の前に、数人の人影が見えた。派手な色の着物を着崩した、どれも目つきの悪い、いわゆるゴロツキと呼ばれそうな男ばかりである。やって来た新太に気付くと、男たちはニヤニヤと、いやらしい笑みを浮かべた。

「よお、おかえりい。新太」

先頭に立った、ゴロツキたちの頭らしい長髪吊り目の男が、馴れ馴れしく新太へと声を掛ける。

「別に、あんたたちに待っててくれって言った覚え、ないけど？」

「俺たちもこんな小汚ねえ家の前で、待ちたくて待ってたわけじゃねえんだよ」

「お父上、ご不在みたいなんだけどあ？ どこ行つたのかなあ？」

「父さんなら、隣町まで肥料の買い付けに行つてるよ」

大きく腰を曲げ、新太へと視線を合わせながら、いやらしい口調で問いかける男。そんな男を、怯むことなく睨みあげ、新太が強く言い返す。

「肥料の買い付け？ かあー、立派な農民に成り果てたもんだなあ」
「違いねえ！ アハハハハ！」

高笑いを見せる男たちに、新太がさらに、表情をしかめる。

「笑うなよ！」

思わず声を荒げた新太に、男たちは素直に、その笑い声を止めた。
「そうだよ！ お前たちの言う通り、父さんは立派な農民なんだ！
だから、何度来たって、父さんはお前たちの言うことなんて聞かない！ だからもう、ここには来んな！」

「んだとお？」

身を乗り出して訴えた新太のその言葉に、吊り目の男が、さらにその瞳を吊り上がらせる。

「生意気言ってんじゃねえよ！ クソガキがあ！」

「う！」

向かってくる、自身の顔とそう変わらない大きな拳に、新太は思わず怯えた表情を見せた。だが、新太が瞳を閉じるか閉じないかのその寸前で、男の拳が止まる。

「え……？」

止まる拳に、戸惑うように声を漏らす新太。拳を止めるように、男の手首を握り締めた白い手は、いつの間にか新太の横へと立っている飛壱のものであった。男よりも随分と細腕であるというのに、飛壱は難なく止めているように見える。見た目以上に、力があるようだ。飛壱は、静かな表情で、拳を繰り出してきた男の方を見ている。

「お、兄ちゃ……」

「何だ、てめえ！」

手首を掴んでいた飛壱の手を振り払い、男が飛壱を睨みつける。

「大の男が、寄ってたかって子供苛めて、恥ずかしくねえの？」

「んだと！？」

挑発めいた飛壱の発言に、男たちがもともと柄の悪い顔を、さらにしかめていく。

「おい、こいつ、鞘だけ背負ってるぜ！」

男の一人が、飛壱の背中にある鞘のみのそれに気付き、笑みを浮

かべて声をあげた。その言葉に興味を引かれたのか、男たちが皆、飛壱の背中を覗き込む。

「マジだ！ 空の鞘持ってやがる！」

「何だあ？ こいつ」

小馬鹿にした様子で、次々と声を発していく男たち。

「おいおい、小憎。刀差す勇気もねえくせに、俺たちに楯突いてんじゃねえよ」

楽しげに笑みを浮かべながら、先程の吊り目の男が、自身の腰元へと手を伸ばし、差していた鞘から、鋭い刀を抜いた。それに続き、他の男たちも次々と刀を抜いていく。刀が放つ光に、新太が青ざめた表情を見せる。鞘しか持っていない飛壱と、子供の新太が、刀を持った男たち相手に、敵うはずがない。

「お、お兄ちゃ……！」

「これが刀つてもんだ！ 憧れんなよ、小憎！」

「あ……！」

新太が逃げることを提案する間もなく、吊り目の男が、抜いたばかりのその刀を、躊躇なく飛壱へと振り下ろした。

「お兄ちゃん！」

新太の必死の声が響く中、下のクマばかりが目立っていたその瞳を鋭くした飛壱が、素早く胸元の紐を解き、背中から自由になった鞘を、刀のように右手に構えた。

「鞘だけで、刀相手しようってかあ！？」

すでに勝ち誇った笑みを浮かべ、男が、鞘を構えた飛壱へと、刀を下ろす。一方の飛壱は、焦りの色一つ見せずに、鞘を振り上げると、鋭いその振りで刀の下りる先を変え、空いた男の懷に、思いきり鞘を突き出した。

「うっう！」

鳩尾を鞘の先で深く突かれ、吊り目の男が苦しげな声を漏らし、力なくその場に倒れ込む。そのあまりに速い動きと、鮮やかな鞘捌きに、新太も他の男たちも、思わず目を見張ってしまふ。

「こ、この！」

啞然としていた自分を、何度か首を横に振って奮い立たせ、一斉に飛壺へと向かっていく他の男たち。一気に三人から刀を向けられたが、飛壺はそれにも動じず、鞘だけを使って、目にも留まらぬ速さで、次々と男たちを薙ぎ払っていった。まるで相手にもされぬまま、倒れていく男たち。男たちを寄せ付けない飛壺を、新太が茫然と見つめる。

「鞘、だけなのに……めちゃくちや強い」

「ぐはああ！」

新太が感心するように呟いたその時に丁度、最後の男が、地面へと倒れ込んだ。男たちが皆、倒れたことを確認すると、飛壺は肩の力を抜き、鞘をそつと下ろす。

「こ、この！ 覚えてやがれ！」

立ち上がることもやつとの様子の男たちが、言葉だけは強気に言い放って、足早にその場を駆け去っていく。あれほどに力の差を見せつけられては、もう一度、刃向かう気にもなれないだろう。遠ざかっていく男たちの背を、新太はまた、茫然と見つめた。

「ふう」

男たちの姿が完全に見えなくなったところで、新太がホツとしたように一息つく。

「す、凄いね、お兄ちゃん！ 鞘だけなのに、刀持ったあいつ等相手に、一瞬で……！」

「うつう……」

「お兄ちゃん！？」

目を輝かせ、飛壺の方を振り向いた新太であったが、突然、その場に倒れ込む飛壺に、焦った様子で駆け寄っていく。

「どうしたの、お兄ちゃん！ まさかどつか斬られ……！」

「腹、減った……」

「へ？」

豪快に鳴り響く腹の虫に、新太はどこか、間の抜けた声を漏らし

た。

「かぁー、うめえ！」

新太に引きずられるようにして、新太の家の居間へと運ばれた飛壺であつたが、新太が用意した料理が居間へと運ばれてくると、すぐに起き上がり、休むことなく、料理を口に運び続けた。すると、見る見るうちに元気を取り戻し、飛壺が大声と共に、満面の笑みを見せる。

「悪いなあ、新太！　こんなにご馳走になっちまって」

「いいんだよ。お兄ちゃんにはさつき、助けてもらったし、そのお礼も兼ねる」

「そうかあ？　それにしてもお前、料理上手いなあ」

「お母さんが小さい頃に死んじゃって、それから、炊事は全部、やってきたから」

台所からもう一品、野菜のたっぷり入った汁を持って来ながら、

新太が答える。

「へえ、えらいなあ。お前」

何の偽りもなく向けられる、飛壺からの笑顔と、誉める言葉に、新太が少し照れくさそうに俯く。汁の入ったお椀を台に置くと、新太はすぐに、居間の壁際へと視線を移した。壁には、飛壺が座るときに下ろした、何も入っていない鞘が、立て掛けられている。

「ねえ」

「んん？」

「なんで、鞘だけ持つてるの？」

新太が鞘から、飛壺へと視線を移し、率直に問いかける。その問いかけに、飛壺は少し目を細め、無我夢中で料理を運んでいた、箸を止めた。

「鞘だけ持つて、生まれてきたから」

少し口元を緩め、飛壱が短く答える。

「鞘を持つて、生まれた？」

「ああ。こう、ぐつと抱き込むような感じで」

聞き返す新太に、飛壱が自分を抱き締めるような態勢を作り、説明する。

「嘘」

「ウソじゃねえよ」

「あんな長い鞘持ったまま、お母さんの体から、生まれて来られるわけないよ」

「生まれた時は、こんくらい短かったんだよ。俺の成長に合わせて、鞘も長くなったんだ」

「嘘」

「だから、ウソじゃねえって」

生まれて来た時の鞘の長さを、指を使って説明する飛壱であったが、新太はその言葉に聞く耳も持たず、すぐさま疑いの目を向けた。あつさりと否定され、飛壱が不満げに口を尖らせる。

「そんな人、見たことも聞いたこともないよ」

「俺も俺以外、知らねえなあ」

暢気に答え、また、料理を口に運び始める飛壱。信じられない話ではあるが、飛壱が嘘をつくような人間にも見えない。困惑した頭を押さえ、新太は卓袱台に肘をついた。

「でもさあ、いくら持つて生まれたっていつても、鞘だけじゃ不格好じゃない？」

「そうかあ？」

「そつだよ」

鞘だけを持った異様な姿が、町人たちの視線を集めていたことなど、まるで気付いていない様子の飛壱に、新太がまた、呆れたような表情を見せる。

「それに、さつきみたいなこともあるだろうし、適当に合う刀、差したら？ あ、それか、その鞘に合う刀、造ってもらうとか！ 実

はさあ、うち……！」

「それじゃ、意味ねえんだ」

提案する新太の言葉を、穏やかな笑みを浮かべた飛壺が、やんわりと否定する。箸を止めた飛壺が振り返り、壁に立て掛けた鞘を見つめる。

「ちゃんと、巡り合わねえと」

「巡り、合う……？」

飛壺の言葉の意味がわからず、新太が大きく首を傾ける。

「新太、帰ったぞー」

「あ、父さんだ」

玄関から響く声に、新太が嬉しそうに立ち上がる。居間の襖を開くと、すぐに玄関があり、そこに、髭面の大柄な男が立っていた。男はよく日に焼けており、黒い肌が一段と逞しさを表現している。段差になっている玄関へと降り、草履を履いた新太が、男の元へと駆け寄っていく。

「父さん、お帰……！ あれ？」

笑顔で迎えようとした新太が、父が小脇に抱えている何かに気づき、眉をひそめる。抱えられているそれは、まったく動く気配はないが、人のように見えた。

「父さん、それ……」

「ああ。町で、倒れていたんだ。四日も何も食ってないらしい。何か飯を作ってやってくれないか？ 新太」

「今日は、そういう人が多い日なのかなあ」

「ん？」

しみじみと呟く新太に、新太の父は、不思議そうな顔を見せた。

2・承

「うむ、実に美味！」

満足げな笑顔で声を張り上げるのは、十代後半くらいの少女であった。腰ほどまで伸びた黒髪はとても艶やかで、美しく整った、どこか気品ある顔立ちをしている。黒を基調に、真っ赤な花の描かれた、見るからに高価な着物を着ており、とても空腹で倒れていたとは思えない、高貴な雰囲気纏った少女だった。だが口調は変に古風で、新太はどこか呆気にとられたように、少女を見る。

「其方、料理が上手いのだな」
そなた

「う、うん。小さい頃にお母さんが死んじゃって、それから、炊事は全部、やってきたから」

先程、飛壺とした会話を繰り返す新太。父が拾って来たその少女に、すでに飛壺への料理を作っていたため、すぐに、それをそのまま差し出した。飛壺にも負けぬ速度で、その料理を平らげた少女は、見る見るうちに回復し、顔色を良くしていった。

「そうか。えらいな」

「お姉ちゃんは、どうして四日も、何も食べてなかったの？ 見た感じ、お兄ちゃんと違って、お金持ちそうだけど」

「どういう意味だよ？」

少女へと素朴な疑問を向ける新太のその言葉に、少し引つ掛かりを覚えたのか、隣に座る飛壺が、不満げに表情をしかめる。

「旅の途中、財布を落としてなあ」

「それは災難だったね」

「うむ。どこかで、適当な奴の身ぐるみ剥いでやろうと思ったんだが、四日も何も食っていないと、さすがに脅す気力すら湧いてこなくてな」

「え………？」

少女の言葉に、新太の表情が凍る。

「体力あつたら、追い剥ぎする気、だったの？」

「追い剥ぎとは、人聞きが悪い。何の関係もない人間に、私のために、手持ちの金品をすべて、無料で提供してもらおうとしていただけだ」

「それを追い剥ぎって言うんだよ！」

丁寧に言い直す少女に、思わず怒鳴りあげてしまう新太。

「父さん、この人、見た目より凶悪かも……」

新太が俯き、この場に居ない父に、ひっそりと助けを求める。

「心配するな。其方たち親子を、脅す気はない」

「当たり前だよ！ 命の恩人の身ぐるみ剥いたら、鬼だよ！」

笑顔で言い放つ少女に、新太は思わず声を荒げる。

「なあ新太、追い剥ぎって、何だ？」

「お兄ちゃんはおつと、世間を知った方がいいと思うよ」

「へ？」

新太の冷静な言葉に、不思議そうに首を傾げる飛竜。貰った握り飯すら、人にあげてしまった飛竜と、命の恩人すら、身ぐるみ剥こうとする少女。同じように空腹で、新太親子が助けた二人とはいえ、相当に人種は異なるようだ。

「新太」

そこへ、奥の部屋から、新太の父がやって来る。

「畑へ行ってくる」

「あ、僕も手伝うよ」

「今日はいい。お前は、二人をもてなしてやってくれ」

新太の父は、立ち上がろうとした新太にそつと笑いかけ、軽く頭を撫でる。

「刀工なのか？」

「え？」

いきなりの少女の言葉に、新太の父が驚いたように振り向く。

「な、何故」

「奥の部屋に、何本も刀が立て掛けられているのが見えた。窯やら

金鎚やらも見えたし、それに、両手の肉刺^{まめ}や火傷痕は、刀工独特のものだ」

「はあ……」

つらつらと言葉を並べる少女に、新太の父がどこか感心の声を漏らす。確かに新太の父の両手には、潰れた肉刺の痕や、無数の細かい火傷痕が残っているが、これを見ただけで、刀工だとわかる者など、ほとんど居ないだろう。

「刀に、詳しいんですね」

「まあな」

料理を口元に運びながら、少女が手短に答える。

「昔の話です。今はもう、刀はすっかりやめて、畑で大根やらネギを作っています」

父の言葉を聞きながら、新太がどこか、元氣なく俯く。

「そつかあ。それでお前、さつき俺に、鞘に合う刀造ってもらえばいいとか言ってたのか」

先程の新太の言葉を思い出し、納得したように頷く飛壱。

「ん？ てことは、さつきの柄の悪い連中も、親父さんに刀を造ってもらったのが、目的だったのかあ？」

その飛壱の言葉に、新太の父が、途端に表情を曇らせる。

「またあいつらが来たのか？ 新太」

「あつ……」

鋭く問いかけてくる父に、少し困った表情を見せる新太。

「あ、う、うん。け、けど、平気だったよ！ お兄ちゃんすつごく強くて、追っ払ってくれたし！」

新太が大きく笑顔を作り、明るく振る舞うが、曇った父の表情が晴れることはなく、むしろ、益々、険しくなっていくようであった。二人のやりとりを、飛壱と少女が、料理を口に運びながら見守る。

「困ったものだな、連中にも」

「ね、ねえ。お父さん」

深々と肩を落とした父に、新太が少し躊躇いがちに声を掛ける。

「刀、造ってあげたら？」

「何？」

思いがけない新太の言葉に、父の眉間に皺が寄る。

「これ以上、付き纏われても迷惑だし、刀一本、造ってあげるだけで、あいつらともう関わらずに済むなら……！」

「新太」

父の強い口調が、新太の言葉を遮る。

「俺はもう、刀は造らない。そう決めたんだ」

「け、けど！」

「新太」

新太の声が、またしても強く、遮られる。

「一本の刀というのは、お前が考えているよりも、もっとずっと、重たいものだ」

射るような眼差しと、真剣な表情で、まるで言い聞かせるように、新太へと言葉を放つ新太の父。その父の言葉は強く、新太はそれ以上、言い返すことはせず、その場で静かに俯いた。俯いたままの新太を見て、少し肩を落とすと、新太の父が新太から視線を逸らす。

「畑に行ってくる。客人を頼んだぞ」

新太に言葉を掛けると、新太の父は、飛壺と少女に一礼し、そのまま居間を出て、家を出て行った。父の背中が去っていった玄関を見つめ、新太が少し眉をひそめる。

「はあ、あ、また失敗！」

「失敗？」

嘆くように言い放って、再びその場に座る新太に、飛壺が首を傾げる。

「いや、十分旨めえぞ？ この料理」

「誰も料理の話なんか、してないよ！」

惚けているのか何なのか、いまいち会話に付いてきていない飛壺に突っ込みながらも、それでも新太の表情は晴れなかった。

「僕、父さんに、刀工に戻って欲しくてさ」

「刀工に？」

「うん」

聞き返した飛壺に頷きながら、新太が静かに立ち上がり、父が入ってきた、奥の部屋へと続く襖を開ける。そこには確かに、少女の言う通り、何本もの刀の入った壺や、埃をかぶった窯、大鎚などが置かれていた。

「まあ、今は昔と違って、平和な世の中だからさ。刀造ったって、ろくにお金にならないっていうのは、わかるんだけどね」

その、ろくに使われていない部屋を見つめ、新太が表情を曇らせる。

「けど、そんな簡単に捨てられるものだったんだなって」

寂しそうな新太の背中を、飛壺と少女が、黙ったまま、見つめる。「父さんにとつての“刀”って、その程度のものだったんだなって思うと、何か、ちよつと悲しかった」

新太が静かに、襖を閉じる。

「そうか？」

「え？」

急に入って来る批判的な声に、新太が戸惑うように振り返る。その声を発したのは、未だ黙々と食事を続けている少女であった。

「むしろ、その程度のものではなかったから、刀を捨てたように見えただけだな」

どこか悟ったように言う少女に、新太が不満げに口を尖らせる。

「まあ、お姉ちゃんには、僕の落胆具合なんてわからないよ。刀造ってる時の父さん、本当に格好良かったんだから」

拗ねたような口調で、言葉を続ける新太。

「それなのに今は、畑だ、野菜だって、毎日、毎日……」

徐々に俯いていく新太のその言葉は、不満げであった。刀を造る父に憧れていたからこそ、今の野菜を作っている父を、新太は受け止めきれずにいるのかも知れない。

「野菜、旨くていいけどなあ」

「別に、野菜を作ることが悪いって言うてるわけじゃないよ。けど俯いたままの新太の表情が、寂しげに曇る。」

「けど、刀造った時の父さんと比べたら、やっぱり……」

新太の中にある、言葉に出来ないもどかしさのようなものが、何となくわかる気がして、飛壱はそのまま何も言わず、そつと目を細めた。

「ま、まあ、どうにもならないこと、ウジウジ言っても仕方ないしね！ だから僕、自分で刀工になろうと思ってさ！」

「刀工に？」

「うん！」

聞き返した少女に、新太が得意げに言い放つ。

「それで、父さんの代わりに、世界で一番強い刀を、“正義の刀”を造るんだ！」

「正義の刀？」

「うん。伝承なんかで出てくる化け物、例えばそう、鬼とかでも、一振りで斬り裂いちゃうくらい強い刀！」

「へえ、そいつは凄げえな」

「でしょ！？」

感心したように言う飛壱に、新太がまた、嬉しそうに笑う。

「“正義の刀”を造って、悪い奴らを斬り倒して、僕は、困ってる人たちを助けるんだ！」

声を弾ませ、自身の夢を語る新太。

「僕がそうやって活躍すれば、父さんもまた、刀を造る気になってくれるかも知れないし！」

「成程、な……」

飛壱とは異なり、特に笑みなどは浮かべぬまま、少女は静かに、台の上に箸を置いた。温かくも冷たくもない、真剣とまではいかないが、どこか鋭い表情を見せて、少女が、まっすぐに新太を見つめる。

「では、刀で斬れぬ鬼と対峙した時は、どうするのだ？」

「え？」

少女の急な問いかけに、思わず戸惑いの声を漏らす新太。突き刺さるような少女の視線を浴びて、新太はまるで、責め立てられているような気持ちになり、いたたまれなくなつて、すぐに視線を外す。「刀で斬れない鬼って何だよ？ すっげえ硬い鬼とか？」

口を挟んだのは、飛壺であつた。飛壺の言葉に勇気づけられたのか、新太がまた、顔を上げる。

「ど、どんなに硬い鬼でも平気さ！ すっごい硬い鋼鉄で造るから！」

「へえー、そりやもう、無敵だな」

自分の調子を取り戻した様子で、また笑顔を見せる新太に、飛壺も笑みを零す。二人のやりとりを見つめながら、少女は晴れない表情のまま、再び箸を取る。

「そうか……」

少女の小さな声は、料理を食べる、その音に消えた。

一方、新太と二人を家に残し、家のすぐ横に広がる畑へと出た新太の父は、鍬を片手に、まだ整っていない畑を耕し続けていた。照りつける日差しに、汗が滲み、その滲んだ汗を、時より、鍬の振る手を止めて拭う。

「ふう」

「よお、源太さん」

一息ついていた新太の父が、自身の名を呼ばれ、声のした方を振り向く。源太が振り向いた先に立っていたのは、先程、飛壺が追い払ったゴロツキたちであつた。男たちの姿を見た途端、源太が眉をひそめ、表情を陰しくする。

「また、あんたたちか」

「そう、あからさまに嫌そうな顔、してくれんなよ。一応、あんた

を待ったために、こっちは半日近く時間使ってたからさ」

頭らしき吊り目の男が、源太へと距離と縮めながら、笑顔で声を掛ける。飛壺に鞘先で鳩尾を突かれ、苦しそうにしていた時の様子は見受けられない。もうすっかり、回復したようである。

「勝手に畑に入らないでくれるか？ 折角、耕したのに、荒れてしまっ」

「ああ？」

源太に歩み寄るため、畑に入ろうとした男を、強く制する源太。

その言葉に、男が少し顔をしかめる。

「すっかり農民だなあ、あんたも。ちょっと前までは、ここいらで一番の刀鍛冶なんて、呼ばれてたのによ」

「俺はもう、刀工はやめたんだ」

「別に俺たちは、刀工に戻って、言ってるわけじゃねえ。もう一本だけ、刀を造ってくれて言ってるだけだ」

いやらしい笑みを浮かべ、男はさらに、口を開く。

「唐吉さんは大層、あんたの刀を気に入っててなあ。他の刀じゃ物足りねえから、どうしてもあんたに造ってほしいんだとよ」

「俺はもう、刀を造る気はないと、何度も言ってきたはずだ。唐吉さんにもそう伝えてくれ」

「釣れないねえ、あんたも」

男の言葉など、寄せ付けないほどにはつきりとした口調で言い放つ源太に、男が少し呆れたように肩を落とす。

「あんたがいつまでも釣れねえから、今回は、唐吉さんが直々にあんたに頼みたいってんで、あんたを屋敷に連れて来てくれて言われてる」

「行くわけがないだろう」

「いいのかい？」

どこか試すような、含みのある声で問いかけてくる男に、源太が眉をひそめる。

「あんたが来てくれねえってんなら、代わりに、あんたの可愛い息

子さんに来てもらうことになるかも知れねえけど？」

男のその言葉に、源太が顔色を変える。

「ふざけるな！ 新太は関係ないだろう！？」

「ああ。あんたが大人しく、俺たちの言うことを聞いてくれたら、関係ないままだぜえ？」

声を荒げた源太にも動じず、男はまた、試すように源太へと問いかけてくる。その問いかけに、思わず口ごもる源太。

「さあ、どうする？ 源太さん」

選択の余地などなく、源太は、微笑む男の前で、力なく俯いた。

「かぁー、食った食った！」

台の上に並べられた料理を、一欠片と残さず食べ終えた飛壱が、膨らんだ腹を叩きながら、少し背を倒すようにして、満足げな笑みを浮かべる。

「うむ」

少女も満足した様子で、箸を揃え、台の上へと置く。

「後はこれで、晩飯をもらえれば、言うことはないな」

「晩飯！？ うっわぁー、早く食べてえなぁ！」

「今まで、ずっと食べてたでしょ……？」

まだ食欲を見せる飛壱と少女に、新太が思わず呆れた様子で表情をしかめる。三日四日食べていないと、一食くらいでは腹は満たされないのだろうか。

「何なら、一晚、宿として借りてやってもいいが？ 無論、無料で」

「図々しいんだよ、さっきから！」

偉そうな物言いを見せる少女に、新太が我慢ならずに怒鳴りあげる。

「まあでも、もう暗くなってきたし、泊めてあげても……あれ？」
台所に空になった食器を運んでいていた新太が、開いたままの

勝手口から、暗くなり始めた外を見た途端、何かに気付いた様子で首を傾げる。

「そついえば父さん、遅いなあ。もう暗いのに」

「畑に行つてんだろ？」

「うん。僕、ちよつと見て来るよ。二人は家で待つてて」

飛壺の問いに答えると、新太は二人に笑顔を向けて、足早に勝手口から外へと出た。源太の持つ畑は、家とは目と鼻の先だ。もうほぼ暗くなりかけている空の下、新太が道を駆け抜け、すぐに畑へと辿り着く。だがそこに、父の姿はなかった。周囲を大きく見回してみても、どこにも源太の姿はない。

「お父さん？」

戸惑うように首を傾げながら、新太が畑のすぐ近くへと寄つていく。

「あつ……」

畑を覗き込んだ新太が、一瞬にして表情を曇らせる。折角、耕した畑には、無数の踏み荒らされた跡が残っていた。心を込めて畑を作っている父が、このような、氣遣いのまるでない足跡を残すはずがない。それは、源太以外の誰かが、畑に入った証であった。すぐに表情を陰しくした新太が、先程よりも駆け足で、家の中へと戻っていく。

「おう、新太。親父さん、仕事終わつてたかあ？」

自ら食器運びを行っていたらしい飛壺が、勝手口から飛び込んで来た新太へと、明るく声を掛ける。だが新太は、その問いには答えず、そのまま、居間の奥の部屋へと入っていつてしまった。

「新太？」

不思議そうに首を傾げる飛壺の声に、まるで片付けをしようとしていない少女が、顔を上げる。少女が見つめる中、新太は、奥の部屋に置いてあった刀の一本を手に取り、居間を通り抜けて玄関へと降り、そのまま二人に見向きもせず、家を飛び出していった。

「あ、お、おい！ 新太！」

飛壺が止める間もなく、新太の去っていく足音は、どんどん遠ざかっていってしまう。

「何だ、慌ただしいな」

もう新太の足音すら聞こえなくなった頃、少女が少し呆れたように呟く。あまり興味を示していない少女とは異なり、飛壺は険しい表情となって、目を細める。

「新太！」

壁に掛けてあった鞘を手に取り、飛壺が新太の後を追うように、家から飛び出していく。その場に少女だけが取り残され、家は一気に静寂に包まれた。

「まあ一応、飯の礼もあることだしな」

どこか面倒臭そうに言うと、少女がゆっくりと立ち上がった。

3・転

間の襖を取り払い、二つの部屋を繋げた、広々とした畳の間の中で、源太は胡坐をかいていた。その表情は厳しく、前方ただ一点を、まるで睨みつけるように見ている。その視線の先、畳から少し段になったような場所には、漆塗りの立派な座椅子が置かれ、そこには一人の男が座っていた。

「そこまで睨みつけられると、いつそ清々しいな」

源太の視線を浴び、座椅子に腰掛けた男が、口元を歪め、楽しげに笑う。まだ年若い、三十前後に見えるその男は、目尻の下がった細い瞳をしており、試すような視線を、源太へと向けている。肩ほどまで伸びた黒髪を、後ろで一つに縛っており、派手な柄の着物の、胸元はだらしなくては駄目だ。男の戦ってきた証のように、そこから、幾つもの刀傷が見えている。座椅子の横には、一本の刀が置かれていた。

「別に、そこまで否定されるようなことは、していないだろう？」

俺はただ、刀工であるお前に、刀を造ってくれと頼んでいるだけだ。楽しげなその笑みを向けて、男が言葉を続ける。

「他の刀を何本も試したが、やはりお前の刀に敵うものはない。お前の刀でないと、俺は満足出来ないんだ」

「唐吉さん……」

厳しい表情のまま、源太がそつと、目の前の男の名を呼ぶ。

「あんたに何度言われても、俺の答えは変わらない。俺はもう、刀は造らない」

「何故だ？ お前ほどの刀工が、何故、刀を造ることをやめた？」

「何故……？」

源太が膝の上で、自身の拳を強く握り締める。

「あんたが、俺の刀で、罪もない人間を何人も殺したからだ！」

立ち上がり、声を張り上げた源太を見上げ、唐吉は細い目をさら

に細め、満足げに微笑む。

「仕方ないだろう？」

問いかけるように言いながら、唐吉は源太から視線を逸らし、座椅子の横に置かれていた刀を手に取った。慣れた手つきで、唐吉が鞘から刀を抜く。抜かれた刀の刀身は、その鞘の半分ほどしかなかった。恐らくは、真ん中で折れてしまったのだろう。

「お前の刀は、人の赤い血に染まっている時が一番、美しいのだから」

折れた刀身を見つめ、唐吉がどこか、うつとりしたように言う。

唐吉の見つめるその刀身は、錆びたような赤いものが、至るところにこびりついていて。それが何なのかを容易に理解し、源太はさらに、その表情をしかめる。

「だが、これでは、人が斬れぬ」

「俺は……」

残念そうに呟く唐吉の前に、源太がゆっくりと口を開く。

「俺は、血に染まった刀を、美しいと思ったことなんて、一度もない」

「それはお前が、刀で人を斬ったことがないからだ」

源太の言葉を嘲笑うかのように、唐吉が声をかぶせる。

「飛び散る赤い滴が、この透きとおる刃に刻まれる瞬間……あれは堪らないぞ？ 一度やれば、夢に見るほど癖になる」

「だから、意味もなく、罪のない人たちを殺し続けたっていうのか？」

心酔する唐吉に、嫌悪感を覚え、言い捨てる源太。

「俺は絶対に、あんたの刀は造らない！」

はつきりと言い放つ源太に、ずっと浮かべられていた唐吉の笑みが、ついに止まる。細められた瞳は、今度は、突き刺すように源太を見つめた。

「命と引き換えだと、言ってもか？」

唐吉が言葉と共に、持っている刀の先を、源太へと向ける。それ

は、鋭い刃先もない、折れた刀だというのに、唐吉の発する圧に、源太は思わず、怯むように身を引いた。だが源太は、強く唇を噛み締め、自分を奮い立たせるように、まっすぐに唐吉を見つめる。

「命など、いらん！ お前のような腐った人間に、刀を託しはしない！ それが刀工としての、俺の誇りだ！」

「そうか」

はつきりとした源太の答えを聞き、唐吉が深々と肩を落とした。

「いらん、か……」

「離せ、離せよ！」

「え？」

その時、部屋の横の襖が開くと、大きな声が二人の間に入って来た。その声の主の姿を見て、源太が大きく目を見開く。

「新太！」

「お、父さん……」

源太をここへと連れてきたゴロツキの一人に、抱えられるようにして持ち上げられているのは、新太であった。刀をお守りのように握り締めたまま、ゴロツキの手の中で、身動き取れずにいる新太は、名を呼んだ源太を、どこか申し訳なさそうに見上げる。新太を抱えるゴロツキの横には、刀を構えた別のゴロツキが、楽しげに今か今かと待機していた。源太は大きく顔をしかめ、唐吉の方を振り向く。

「ふざけるな！ 新太は関係ないだろう！？」

「こいつ等から、聞かなかったか？」

声を荒げる源太を、唐吉は、いたって冷静に見つめる。

「“お前が大人しく、俺たちの言うことを聞けば、息子は関係ないままだ”と」

「ク……！」

唐吉の言葉に、源太が、血が滲みそうなほど強く、唇を噛み締める。

「へへへ」

「お父、さん……」

近づくゴロツキの刃に、新太が力なく、父を呼ぶ。

「さあ、もう一度、聞こうか。源太」

再び笑みを浮かべた唐吉が、座椅子から立ち上がり、その視線の高さを、源太と揃える。問いかけるその口調は、もう答えを知っているかのように余裕がある。

「刀工としての誇りと、息子の命。お前は一体、どちらを選ぶ？」

問われるその言葉に、源太が頭を抱え、徐々に俯いていく。父の苦しげなその姿を直視出来ず、新太もまた、視線を落とす。深く俯いた源太が、何の力もなく、言い落とした。

「わかつ……」

「ぎゃああああ！」

源太の言葉が終わる前に響く、ゴロツキ男の悲鳴。

「ぐほおおう！」

「え？」

部屋の中へと転がってくる、大きな図体のゴロツキに、源太が戸惑った声をあげる。唐吉も眉をひそめ、ゴロツキたちが居る縁側を見やった。

「相変わらず、大人げないことしてんねえ。あんたら」

「お、お前は、昼間の鞘小憎！」

呆れたようにそう言いながら、その場へと姿を現したのは、飛壱であった。相変わらず、空っぽの鞘を右手に握り、左手には、いつの間にかゴロツキから救出したらしい新太を抱えている。

「あんたは……」

「お兄ちゃん！」

源太が茫然と見つめる中、新太が嬉しそうに飛壱を呼ぶ。

「鞘、だけ？」

ゴロツキたちは一度、飛壱と相対しているが、初めて飛壱を見た唐吉は、鞘だけを持つ飛壱のその異様な姿に、そつと眉をひそめた。「面白い格好だな、小憎。それとも何か？ お前もこの男に、刀を造ってもらいに来たのか？」

「別に、刀を造ってもらう必要なんかねえよ」

新太を床へと下ろし、飛壱がまっすぐに、唐吉を見つめる。

「俺は、巡り合うんだ」

「巡り合う？ 刀とか？ 可笑しな小憎だ」

「この！」

飛壱が唐吉と話しているその間に、部屋の中へと吹き飛ばされたゴロツキ以外の、三人のゴロツキが、刀を構え、一斉に飛壱へと斬り込んでいく。飛壱はしなやかな身のこなしで、三人の刃をかわし、右手の鞘を身構えた。まるで自分の腕のように、自由に鞘を動かして、ゴロツキたちの顎下や腹部を、次々と打ち、あっという間に三人を倒してしまう。

「やっぱり、凄い」

その飛壱の動きを、感心した様子で見つめる新太。

「ほお」

唐吉も同じように感心の表情を見せながら、部屋の中で倒れているゴロツキの刀を手にし、右手に構える。刀を手にし、生き返ったように目を輝かせると、唐吉は、目にも留まらぬ速さで、飛壱のもとへと飛び出していった。最後のゴロツキを倒した飛壱が、背後からの殺気を感じたのか、素早く振り返り、振り下ろされた唐吉の刀を、鞘の中央で受け止める。

「大したものだな、鞘小憎」

「あんたは、大したことなさそうだな」

飛壱の挑発めいたその言葉に、唐吉が眉をひそめる。

「その減らず口も、大したものだ」

またもや感心したように笑うと、唐吉が強く刀を振り切り、受け止めていた飛壱の鞘を払う。少し後ろへと押される形となった飛壱へ、躊躇いなく斬りかかっていく唐吉。先程のゴロツキたちとは、比べものにならないほどの速度で、刀を繰り出す唐吉であったが、飛壱は、その唐吉の刀をすべて見切り、難なく鞘で受け止めていた。「唐吉相手に、まったく劣っていない……何者なんだ？ あの子は」

鞘だけで、刀を持った唐吉を相手に、互角の戦いを繰り広げる飛壺の姿に、思わず戸惑った声を漏らす源太。唐吉は、その刀の腕により、この辺り一帯のゴロツキを従えるほどの強さを持った男だ。生半可な腕の者が、相手になる男ではない。

「クソ……！」

唐吉自身も、飛壺の強さに戸惑いを覚え始めたのだらう。冷静だった表情には、徐々に焦りの色が浮かび始め、その刀筋も粗くなってきた。

「餓鬼が！」

感情が先走り、必要以上に大きく刀を振り上げた唐吉の、その隙を逃さず、目つきを鋭くした飛壺が、唐吉が刀を下ろす前に、鋭く鞘先を突き出した。

「う……！」

射るように突き出された鞘先に、振り下ろされようとしていた唐吉の刀が、ぴたりと止まる。唐吉は、目一杯の力を刀に込めていたが、それでも刀が動かないのは、それ以上の力で、飛壺が鞘を突き出したからだらう。しばらくの間、静寂が訪れた後、唐吉の刀の、飛壺の鞘が突いた部分にヒビが入り、次の瞬間、高い音を立てて、刀は折れた。刀身の中央より先が、力なく畳の上に落ちる。

「あつ……」

折れた刀を目の前に、啞然とした声を漏らす唐吉。飛壺が見せた、あまりの強さに、言葉も出なくなってしまうたようである。

「唐吉の使った刀も、別に悪い刀じゃない。それを正面から折るなんて、なんて強度だ。一体、あの鞘は……」

二人の戦いを見守った源太が、刀工としての目線で、分析するように言葉を呟く。

「刀、向いてないよ」

言葉も出ない唐吉に、飛壺は鞘を引き、あつさりと言い放つ。

「あんた」

飛壺のその言葉に、唐吉が大きく目を見開く。

「ち、違う……」

唐吉の口から零れ落ちる、小刻みに震えたような、今までよりも低い声。

「俺が欲しいのは、こんな、折れた刀じゃない……」

喉に響きそうな低い声で言葉を続けながら、唐吉は見開いたままの瞳で、食い入るように、自身の手の中の、折れた刀を見つめる。

「俺が欲しいのは、人が斬れる刀……もっと、もっと斬りたい……斬り、刻んで、しまいたい……」

「唐吉……？」

今までとは、明らかに様子の異なる唐吉に、飛壱が眉をひそめ、近くで見つめる源太も、戸惑うように首を傾げる。

「もっと……もっと俺に、人を斬らせるおお！」

『うつう……！』

唐吉が両手を広げ、天へと突き上げるように叫び声をあげたその瞬間、唐吉の体から、黒い光のようなものが一気に溢れ出し、強い風が巻き起こった。至近距離で吹き抜ける風に、飛壱や源太が、思わず身を屈める。

「グアアアアア！」

「な……！？」

けたたましいその叫び声に、吹きつける強風の中、顔を上げた飛壱が、思わず目を見張る。そこに立っていたのは、唐吉と同じ着物を纏ってはいるが、唐吉とは、まるで別の生き物であった。長い黒髪が風になびき、その髪の間からは、二本の尖った角が見える。鋭い眼光の、獣のような金色の瞳に、牙の生えた、横広がりの大きな口。肌は全身、赤茶けており、折れた刀を持つその指先からは、鋭い爪が伸びていた。体は、唐吉よりも一回り以上大きく、飛壱も源太も、見上げるほどの背丈だ。

「お、鬼……」

その見たこともない生き物の姿を見つめ、新太が伝承の生き物の名を口にする。

「マジ、かよ……」

ゴロツキたちや唐吉を圧倒した飛壱も、異形の生物を前に、茫然となってしまう。

「俺に、人を斬らせる……」

唐吉のものとは異なる、低く唸るような声が響く。

「もつと、斬らせるおお!!」

異形の鬼の叫び声が響いたその瞬間、鬼の握る折れた刀の先から、白い光が放たれ、折れた刃先を再現するように、光が形作られる。

その様子に、さらに驚いた様子で、目を開く飛壱。光で出来た刀を振り上げた鬼は、その巨体を揺らし、源太のもとへと突進していく。

「ううう!!」

「お父さん!!」

怯えた声をあげる源太と、父の危機に身を乗り出す新太。

「クッソ!!」

険しい表情を見せた飛壱が、必死に、源太のもとへと駆けていく。鬼が刀を振り下ろすよりも早く、源太のもとへと飛び込み、源太を横へと押し出すようにして、刀の下から逃す飛壱。だが、源太は避けられたものの、飛壱は避けきれず、鬼の光の刀が、飛壱の右肩を斬り裂いた。

「き、君!!」

「うう……」

血の滲む右肩を押さえ、思わずその場に座り込む飛壱。起き上がった源太が、すぐに飛壱のもとへと駆け寄る。飛壱の右肩の、鋭く斬り裂かれた傷口からは、赤い血が流れ落ちており、とても、右腕をあげられるような状態ではなかった。鞘を持った飛壱の右手が、畳の上に、力なく置かれる。

「斬らせる……もつと、斬らせる……」

「あ!!」

「ク……!!」

また刀を振り上げながら、ゆっくりと二人のもとへと向かってく

る鬼の姿に、飛壺と源太が、険しい表情を見せる。

「お父さん！ お兄ちゃん！」

鬼の迫る二人に、必死の声をあげる新太。飛壺の傷を見れば、戦える状態ではないことも、逃げれる状態ではないことも、すぐにかか。このままでは二人とも、鬼に斬られてしまう。

「どうしよう、どうしたら……！ あっ」

混乱するように言葉を発した新太が、視線を向けたのは、自身の右手に固く握り締めている、一本の刀であった。家を出る時に、父が造ったもののうちの一本を、思わず持ってきてしまったのである。結局は、唐吉の屋敷に来てすぐにゴロツキに捕まって、刀を抜く機会すらなかったのだ。自分の背丈より、少し短いだけのその刀を見つめ、新太が、真剣な表情を見せる。

——世界で一番強い刀を、“正義の刀”を造るんだ！ 例えばそう、鬼とかでも、一振りで斬り裂いちゃうくらい強い刀！ ——

思い出されたのは、自分自身の言葉であった。

「正義の、刀……」

自分自身の放った言葉を繰り返し、新太が強く唇を噛み締め、決意した表情で顔を上げる。力一杯、柄を握り締めたその右手で、鞘から、刀を抜きさる新太。

「う、ああああ！」

鞘をその場に放り投げ、新太が、ろくに刀の構えも取れていないまま、ただがむしゃらに、二人へと迫る鬼の方へと駆け込んでいく。鬼は前方の二人に気を取られ、背後に迫る新太には気付いていない。それを好機に、新太は、鬼の背中に向け、勢いよく刀を振り下ろした。だが、刀は、着物の背の一部を斬り裂いただけで、それ以外、鬼の背を斬りつけた感覚は、新太には一切、なかった。

「え……？」

まるで空を斬るように、手元で落ちていく刀に、新太が戸惑いの声を漏らす。新太が前方を見ると、確かに、着物が斬れただけで、赤茶けた鬼の背に傷はなく、血の一滴すら流れていなかった。

「な、なんで」

「グアアアア……」

「あ！」

新太が答えを出す間もなく、着物を斬られた鬼が、背後の新太に気付き、ゆつくりと新太の方を振り返る。遥かに見上げる形となる、巨大な鬼を目の前に、その表情を、恐怖へと歪めていく新太。

「新太！」

源太が必死に身を乗り出し、新太の名を呼ぶ中、鬼が新太へと、右手の刀を振り上げる。

「あ、ああ……うわあああ！」

怯えた声を漏らした新太が、何度も必死に刀を振るうが、刀はまた、着物を斬り裂いただけで、目の前に迫った鬼を斬り裂くことが出来なかった。何度か振り切ったところで、いくら斬っても斬れないことを悟ったのか、新太の手が自然と止まる。

「あっ……」

新太の口から零れ落ちる、どこか弱々しい声。

——では、刀で斬れぬ鬼と対峙した時は、どうするのだ？——

脳裏に浮かんだのは、少女の凜とした問いかけであった。

「あ……」

新太の右手から、力なく刀が落ちて、畳に転がる。

「グアアアア！」

刀を手放した新太へと、振り下ろされていく鬼の刀。

「新太！」

「クソ！」

悲鳴のような声をあげる源太の横で、必死に右手を動かそうとものがきながら、飛壺が険しい表情を見せる。

「うっう……！」

目の前に迫り来る刀に、新太が強く、両眼を閉じる。

4・結、そして、起

「ギャアアアア！」

「え……？」

次の瞬間、聞こえてきた、自分のものではない叫び声に、新太が戸惑うように、目を開く。

「あ……」

すぐ前方に広がる光景に、思わず目を見張る新太。

「お、姉ちゃん……」

鬼との間に、新太を庇うようにして立ちはだかっていたのは、先程、源太が連れて来た、あの、高貴な雰囲気纏った少女であった。少女は右手を突き上げ、新太へと振り下ろされようとしていた、鬼の刀を受け止めている。よく見ると、少女の右手には、何やら難しい文字の書かれた札ふだのようなものが握られており、その札と鬼の刀との間に、閃光のような金色の光がほとばしっていた。

「あいつ……」

現れた少女を見つめ、飛竜がそつと眉をひそめる。

「月のない闇夜に惹かれ、姿を見せたか。異形のもののよ」

明らかに人とは異なる存在である鬼の前にも、少女は焦った様子なく、冷静な声を発する。

「お姉ちゃん」

「さがっている」

力なく呼びかけた新太に、少女が振り返ることなく、素っ気なく言い放つ。

「あれは、普通の刀では斬れぬ」

はつきりと言い切られ、新太が、自らが落とした刀へと視線を移す。そして、どこか諦めるように瞳を閉じると、少女の言いつけを守るように、後方へと引いた。

「斬らせろ……もっと、斬らせろ……」

「余程、血に飢えているのか。仕方ない。私が闇夜に帰してやろう」
狂ったように、同じ言葉を繰り返す鬼を見つめ、少女が鋭く目を細める。少女が札を持った右手を振り上げると、刀と札の間の閃光が強まり、その光により、鬼が少し後方へと押される。鬼との距離がひらくと、少女は持っていた札を手放し、素早く着物の懷に手を入れ、同じような札を数枚、取り出した。少女は今までも何度もうしてきたかのように、慣れた動作で、取り出したばかりの札を、鬼へと投げ放つ。

「グウ……！」

両手両足、額、胸の各部に札を受けた鬼が、苦しげな声を漏らし、その場で一時、動きを止める。少女が鬼へと右手を向け、凜とした声を放つ。

「滅せ」

少女の声が放たれた途端、鬼の各部に貼られた札が、互いに共鳴し合うかのように、金色の光を帯び始める。その光が徐々に鬼の全身に広がり、鬼の巨体を包み込んでいく。

「グアアアア……！」

強まっていく光に、苦しげな声をあげる鬼。

「すっげえ」

その光景を、飛壱も新太も、ただ啞然と見つめる。見たこともない光景だが、少女が鬼を倒そうとしていることは理解出来た。少女が、鬼を倒し得る力を持っていることも。

「斬り、たい……」

金色の光に包まれながら、鬼が、先程に比べると、随分と弱々しい声を漏らす。

「もつと、もつと斬りたい……俺に、斬らせる。人を、斬らせる。もつと、もつと斬らせるおお……！」

鬼が、内なる感情を溢れ出させるように、激しく叫び声をあげると、各部に貼られていた札が一気に弾け飛び、鬼を包んでいた光が消える。消えてしまった光に、焦った表情を見せる飛壱たち。前方

に立つ少女も、落ちていく札に、眉をひそめる。

「これでも消せぬか。余程、強い欲望らしい」

どこか呆れたように、少女が肩を落とす。

「斬らせろおお!!」

「ク……!」

少女の力から解放された鬼が、少女へ向け、勢いよく刀を振り下ろす。後方へとさがり、それを避ける少女。わずかに斬られた少女の髪が、宙を舞う。

「マズい、な」

再び刀を振り上げる鬼に、落ち着いてはいるが、少女の表情が曇る。

「このままじゃ、あいつも……!」

少女の表情の動きに気付いたのか、少女も打つ手に困っていることを悟った飛壱が、焦ったように声をあげる。その時、飛壱の声に反応するかのように、突然、飛壱の右手の中の鞘が、強く輝き始めた。

「え?」

金色の光を放ち出す鞘に、戸惑うように声を漏らす飛壱。生まれてから長年、この鞘と共に在ったが、鞘がこんな風に、自発的に輝き始めたのは、初めてのことであった。

「な、何……あ、おい!」

勝手に、飛壱の右手の中から飛び出していく鞘に、飛壱が思わず呼び止めるように声を出す。だが飛

壱の声にも鞘は止まらず、宙を翔けるように進んでいく。

「ん?」

やっとのことで鞘が止まったのは、少女のすぐ前であった。突然、目の前まで飛んできた鞘に、少女が戸惑った声を漏らす。

「これは……」

そっと、鞘へと右手を伸ばす少女。鞘は、まるで何か訴えかけている様子で、その身から、溢れんばかりの光を放っている。その光

を見た少女は、手に触れる前に、何かに気付いたように目を細めた。
「そうか」

少女の口元が、少し緩む。

「やっと、“巡り合った”か」

「え？」

馴染みのある言葉を口にする少女に、戸惑いの視線を向ける飛壺。飛壺が見つめる中、少女は鞘には触れぬまま、また右手を懐へと入れる。少女が懐から取り出したのは、先程のように、札ではなかった。

「刀の、柄……？」

戸惑いの声を出したのは、新太。少女が懐から取り出したのは、刀の柄の部分であった。鍔も刀身もない、柄だけの刀の色は赤く、少女の着物ともよく合っている。少女は、右手に柄を持ったまま、左手を伸ばし、鞘の中央を、左手で力強く握り締めた。少女が、柄を持った右手と、鞘を持った左手を、徐々に近付けていく。

「ようやく、目醒めることが出来る」

皆が静かに見つめる中、少女が強く、柄と鞘を引き合わせる。

——その瞬間。

柄と鞘の間から、直視出来ないほどの強烈な光が放たれた。

『うつうつ……！』

あまりに強い光に、新太や源太が目を伏せながら、少し苦しげな声を漏らす。目が潰れてしまうのではないかというほどの、強烈な光。だが、飛壺は、目を閉じることはしなかった。目を閉じて、今目の前で起こっていることを見逃すことだけは、したくなかった。

「これが、目醒め……」

飛壺が見つめる中、放たれた光が一気に凝縮していき、柄の周りを、まるで鍔のように囲う。鍔の出来た柄を、ゆっくりと鞘から引いていく少女。その動きを、飛壺は瞬きをすることも忘れ、食い入

るように見つめる。

「あ……！」

「刀が、生まれる……！？」

驚きの声をあげる新太と源太。少女が勢いよく柄を引くと、空だったはずの鞘から、眩いばかりに光輝く、金色の美しい刀身が姿を現した。

「あれが、刀……俺がずっと、探してた刀……」

少女の握る、美しい刀を見つめ、飛壺が茫然と呟く。

「まあまあか」

目醒めたばかりの金色の刀を見つめ、吟味するように呟く少女。満足げではないが、不満のある様子もない。少女は鞘を着物の帯紐に差し、左手を自由にすると、大事なものを扱うように、両手でゆつくりと、現れたばかりの刀を構えた。目つきを鋭くし、目の前に立つ、鬼と対峙する。

「新太、とかいったか」

「え？ う、うん」

前方の鬼を捉えたまま、背後に立ち尽くしている新太へと、そつと声をかける少女。いきなり話しかけられ、新太は少し驚いた表情を見せたが、慌てて何度も頷く。

「よく見ておけ」

少女が刀の切先を、鬼へと向ける。

「私が斬るのは、鬼ではない」

「え？」

強く言い切る少女に、首を傾げる新太。

「私が斬るのは、憎しみや欲望……醜き感情に吞まれし、人の心」
次に少女が、柄を握り締めていた左手を、刀身をなぞるように、横へと動かす。

「私が振り下ろすのは、“正義の刀”ではない」

前に新太が口にした言葉を使い、少女が話を続ける。

「私が振り下ろすのは、我が心を映す、ただ一本の刃」

言葉を言い終えると、少女が、新太のもとから旅立っていくかのよう、素早く、鬼のもとへと駆け込んでいく。

「グアアアア！」

鬼が振り下ろした刀を避け、鬼の懷へと、飛び込んでいく少女。懷へと入った少女が、金色の刀を、真一文字に、強く振り切る。

少女の振り切った金色の刀が、新太の刀では斬れなかった鬼の赤茶けた肌を、まっすぐに斬り裂いていく。

「ギャアアアアア！」

激しく響き渡る、咆哮。

斬り裂かれた鬼の腹部から放たれたのは、赤い血ではなく、強烈な白色の光。白い光が辺りに飛び散るように放たれ、部屋全体をその光が包み込む。皆が一瞬、視界を失った。

「あ……あ……」

光が収まると、折れた刀を持ち、ところどころ斬れた着物を着た唐吉が、力なく目を閉じ、その場に倒れ込んだ。どうやら、気を失っているようだ。着物こそ斬れているが、他に傷を負っている様子はない。少女の刀は、唐吉自身を斬ることはなかったようである。

「醜い、感情……」

倒れた唐吉を見つめ、どこか考え込むような表情を見せる新太。その新太の視線が、自身が持つて来た、一本の刀へと移る。

「正義の、刀……」

新太の声が、力なく、その場に落とされる。

「ふう」

倒れた唐吉を確認した後、少女が一息つくように肩を落とし、刀の構えを解く。少女はすぐに、腰に差していた鞘を手にし、刀を鞘の中へと収めた。金色の光の鏢が消えると、少女が柄と鞘を離す。そこに、刀の姿はなく、それはまた、ただの柄と、空っぽの鞘に戻っていた。

「ほら」

「あ、ああ」

歩み寄って来た少女から、飛壺が鞘を受け取る。

「痛っ！」

少し右手を動かしただけで走る激痛に、思わず顔を歪める飛壺。
少女と鬼の戦いに圧倒され、忘れていたが、飛壺は鬼に斬られ、相
当の傷を負っているのだ。

「これは酷いな」

「あ！ す、すぐに医者を呼んで来る！」

飛壺の傷口を見て言う少女に、やっと我に返った様子で、ハッと
なった源太が、慌てて立ち上がり、部屋から飛び出していく。

「止血だけでも、しておくか」

少女が飛壺のすぐ横へと膝をつき、懷から取り出した手ぬぐいで、
飛壺の傷を覆っていく。そんな少女を見つめながら、少し躊躇うよ
うに、口を開く飛壺。

「あ、あの、さっ……」

「ありがとう」

「へ？」

言いかけた言葉を遮るように放たれた少女の言葉に、飛壺が首を
傾げる。

「やっと、巡り会えた」

そつと微笑む少女に、飛壺が驚いた様子で、目を見開く。だが、
その表情にはすぐに、笑みが浮かんだ。

「ああ」

翌朝。

「そつか。唐吉たち、捕まったのか」

「うん。僕ら脅したり以外にも、悪いこと、いっぱいしてたみたい」
結局、昨晚、新太の家に世話になった飛壺は、新太に見送られ、
新太の家を出ようとしていた。飛壺の右肩には包帯が巻かれており、

その背には、空っぽの鞘が背負われている。

「あの後、唐吉、すぐに目を覚ましたんだけど、刀への欲望とか、斬りたいって執着とか、きれいさっぱりなくなってる、まるで別人みたいだったんだって」

「まあ、そういう感情は、あいつが斬っちまったからなあ」

昨夜、少女が斬ったのは、唐吉の体ではなく、唐吉の心の中の醜い感情だったのだろう。

「良かったじゃねえか。これでもう、安心だな」

「うん。安心、かな」

「新太？」

微笑みかけた飛壺であつたが、どこか表情の晴れない新太に、首を傾げる。唐吉の脅威がなくなったというのに、新太はあまり、嬉しそうでないように見えた。

「不満か？」

「え？」

少し離れた場所に立っていた少女に問われ、俯いていた新太が顔を上げる。

「唐吉がいなくなったというのに、刀工には戻らず、農業を続ける父親が不満なのか？」

問いかける少女の視線の先には、畑で農作業を行っている源太の姿があつた。そんな父の姿を一瞬だけ振り返り見て、新太がそつと口元に笑みを浮かべる。

「うっん」

そう悩んでいない様子で、新太はすぐに答えた。

「僕、何にもわかってなかったなあって、思ってたさ」

少し自嘲するような笑みを見せる新太。

「刀を、ただ、“格好いいもの”とか、“強いもの”とか、そういう風にしか見てなかった。“人を傷つけるもの”だって、見れてなかった」

新太の言葉に、少女と飛壺が、考え込むように目を細める。

「なんで父さんが、刀を造ることをやめたのか、その理由もわかってなかったくせに、ただ、好きだから、懂れだからって、“正義の刀”を造るとか、言ってた」

「新太……」

どこか辛そうに見える新太を、氣遣うように飛壺が名を呼ぶ。

「そんな自分に、何か、少し呆れちゃってさ……」

「別に、呆れる必要などない」

「へ？」

はつきりと返ってくる言葉に、俯いていた新太が、戸惑いの表情で顔を上げる。新太が顔を上げると、すぐ目の前に、いつの間にか歩み寄ってきたらしい少女が、立っていた。

「新太」

少女の凜とした声が、新太の名を呼ぶ。

「其方が、刀が“人を傷つけるもの”と、刀を“恐ろしいもの”と知ったというのなら、其方はきっと、良い刀工になる」

「え？」

確信を持って告げられる言葉に、新太が目丸くする。

「今の、その心を忘れずにいられたなら、其方はきっと、父に並ぶ、良い刀工になるだろう」

新太に向けられる、少女の穏やかで、優しい笑み。力強い言葉と共に、少女が新太の頭を撫でる。少女の言葉が、ぬくもりがすべて、新太に確信を与えてくれるようであった。

「いつか、本物の“正義の刀”も、きっと造れるよ」

「お姉ちゃん」

目を細めた新太が、少し瞳を潤ませる。

「僕ね、もつともつと、自分の心を鍛えて、それでね！ 醜い感情に吞まれた人を、人の心を救えるような、そんな、“正義の刀”が造りたいんだ！」

「ああ」

大きな笑みを浮かべ、新たな夢を語る新太を、飛壺も笑顔を見せ

て、受け止める。

「もし造ることが出来たら、お姉ちゃん、一番初めに、試し斬りしてくれる？」

「え？」

新太の申し出に、少し驚いた表情を見せる少女。だがすぐに、笑みを浮かべ、少女は大きく頷いた。

「ああ、勿論。試し斬るのは、其方の家の柱でいいか？」

「いいわけないでしょ！ もう！」

「ハハハハ！」

怒ったように頬を膨らませる新太に、飛壱が楽しげに笑い声をあげる。

「では、そろそろ私は行く」

「んじゃ、俺も」

「あ……」

新太に背を向けようとする飛壱と少女に、新太が寂しげな表情を見せる。

「お二人にはお世話になりました。本当に、ありがとうございました」

いつの間にか、新太のすぐ後ろへとやって来た源太が、二人へ向けて、深々と頭を下げる。新太も、源太に促され、頭を下げた。

「どうってことねえって。先に、餓死しそうなことを助けられたのは、こっちだし！」

「それも、そうだったな。忘れていた」

「忘れんなよ」

まるで恩を感じていない様子の少女に、飛壱が少し呆れたように視線を送る。

「じゃあ」

「うん」

「元気でな、新太！」

「お兄ちゃんも、人にあんまり、親切にし過ぎないようにね」

新太と源太に見送られ、飛壺と少女が旅立っていく。前を向いたまま、どんと突き進んでいく少女とは異なり、飛壺は何度も後方を振り返り、笑顔で新太に手を振り続けた。やがて、飛壺も振り返らなくなり、二人の姿が見えなくなる。

「行ってしまったな」

「うん」

父の言葉に、新太は寂しげな笑みで、頷いた。

—— カラン、カラン。

聞き慣れない音が、耳につく。空っぽの鞆が、腰につけられた、木製の物入れとぶつかり合う音。その音を響かせながら、飛壺は、どんと先へと進んでいく少女の後を、少しだけ距離をあけて、付いていく。

「なあ」

「何だ？」

短い呼びかけに、短い返事がやって来る。

「ずっと、旅してんのか？ ああいう、人の心から出てくるっつー、鬼みたいなのを倒すために」

「まあな」

またしても返って来る短い返事を聞きながら、飛壺が少し、考え込むような表情を見せる。

「なあ」

「何だ？」

先程と同じ呼びかけと答えを繰り返す、飛壺と少女。その場で足を止めると、飛壺は、少女の背に向けて、思いきって言い放った。

「その旅、俺、付いていつていい？」

飛壺の言葉に、少女もまた、その場で足を止める。ゆっくりと飛壺の方を振り返った少女は、真剣な表情を見せていた。

「別に面白いものでも、楽しいものでもないぞ」

「いいよ、別に」

「果てもない」

「いいんだ、それでも」

少女の言葉にあっさりと答え、飛壺がそつと、笑みを浮かべる。

「今更、断らねえでくれよ。こっちはなんせ」

浮かべた笑みを、まっすぐに少女へと向ける飛壺。

「お前に出逢う為だけに、この鞘持って十七年、生きてきたんだからさ」

「……そうか。ならば、仕方ないな」

飛壺の言葉を受け、少女もまた、穏やかに微笑んだ。

「そついや、まだ聞いてなかったな。お前の名前」

「ああ。私の名は……」

少女がゆつくりと、口を開く。

「ふたば 弐刃だ」

「弐刃」

飛壺が確かめるように、弐刃の名を呼ぶ。

「よろしくな、弐刃」

「ああ」

差し出された飛壺の手に、弐刃の手が重なる。

「よろしく、飛壺」

鞘は、刀と巡り合い、刀は、鞘と巡り合った。

巡り合った刀と鞘の物語は、ここから、始まる。

鞘少年×刀少女、完。

4・結、そして、起（後書き）

というわけで、鞘少年×刀少女、完結です！

何か続くっぽい雰囲気醸し出してますが、続きません。

思わせぶりですみません。

ここまでお付き合い下さり、ありがとうございました！

そして、和風小説企画という、素敵企画を立ち上げて下さった伊那さま、本当にありがとうございました。

とても楽しかったです。

2011年7月15日 千風

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8913u/>

鞘少年×刀少女

2011年8月5日03時28分発行